

注・参考文献・補説

- 注1 小学校学習指導要領解説 総則編 第3章第1節2 P23
第2期教育振興基本計画（平成25年6月14日閣議決定）においては「自立」「協働」「創造」を基軸とした生涯学習社会の構築に向けて教育政策の推進が提言された。
- 注2 アクティブ・ラーニング授業改革のマスターキー 大杉昭英 明治図書 平成29年1月
- 注3 小学校学習指導要領解説 総則編 第3章第3節 P77
- 注4 指導要領解説で指導案について記述があるのは、道徳編（第4章第2節2）p79～p82のみ
- 注5 子どもの学びとは何か 北俊夫 教育展望臨時増刊No.36 2004.7
- 注6 筆者の造語。学習材と同義。国士舘大学 北俊夫「豊かな教材観に立った授業作りを」広島大学附属小学校教育研究会No.1172 2015.4 を参考にした。
- 注7 指導の要諦を含めた年間指導計画がカリマネでは必需であるが、教育現場の実態では、これを各校が作成することは不可能であることを2019年の本会で指摘した（「カリキュラムマネジメントは実践できるか 一学校の小規模校化―を視点に」）自前の年間指導計画を有している小中学校は皆無と言ってよく、殆どが教科書会社作成の年間指導計画である。
- 注8 教育評価における客観的評価と主観的評価との関係は近年の評価論の研究対象になっているが、筆者は、教師の主観的評価に子ども自身の主観的評価を活かすという点で「間主観」とした。この分野での研究には、教育評価における主観の再検討（早稲田大学 教育・総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）第71号、2023年3月 根津朋実）等がある。道徳科の評価では、子どもの毎時の振り返りを積み重ねて、子ども自身が自分の変化（成長）を見だし、それを教師が肯定的に評価することを勧めている。これも「間主観」である。
- 注9 振り返りの実践としては、2018年の本会旭川大会で、K中の実践例を示した。以下、抜粋。
「K中の振り返り評価は、子どもによる個人内評価というべき自己評価でものであった。例えば、社会科では、振り返りで「自分の考えを変えた友達の意見」を見いだすことで、問いから解決に至る理解の筋道を確認し、学習内容の定着を図り、加えて、このことで初めから終末に至る変容（成長）を認識し、さらに交流場面で自分に影響を与えた他者の意見を認識することで、他者をかけがえのない存在として意識できるようになったのである。」
- 注10 目標と問題との関係を示すシートで、テスト結果を基に子どもは自身が自己の学習課題を把握して学習へ向かうことができるように図ったテスト改善。プレゼンで具体を示す。
- 注11 指導要領解説総則編 第3章第1節3 P37
田村学 2022.06.03 教育技術 複数の事実に関する知識や方法に関する知識が関連付けられ、統合されるようにすることで、概念化され、より活用しやすいものにすることが大切。
筆者は田村学論を支持
- <補説> 資質能力三つの柱 「知識・技能」「思考・判断・表現」「学びを人生や社会に生かそうとする」「学びに向かう力・人間性」で整理されているが、教師の授業観の転換を図るために、「生きて働く（知識・技能）」「未知の状況に対応できる（思考・判断・表現）」「学びを人生や社会に生かそうとする」における下線部こそが重要で、これをアナウンスすべきと考える。